

金沢大学附属図書館
〈環境学コレクション〉推進事業
公開シンポジウム

里山 × 里海 × 文学

2013年7月20日（土）

金沢大学自然科学系図書館 A V ホール

中世日本の「里」と「山」

— 加賀輕海郷の開墾と供水 —

金沢大学人間社会学域学校教育学類

黒田 智

1 線引きの心性

(1) 開発神話 という線引き

宮沢賢治の森

こゝへ畑起していゝかあ。

いゝぞお。

こゝに家建てていゝかあ。

ようし。

こゝで火たいてもいゝかあ。

いゝぞお。

森は一ぺんこたへました。

1200年前の開発神話

此より上は神の地と為すを聴さ
む。此より下は人の田と作すべし。
今より後、吾、神の祝と爲りて、永
代に敬ひ祭らむ。
冀はくは、な崇りそ、な恨みそ。

(『常陸国風土記』)

この地に塚を築き、
あなたの御霊をお祀りします。
恨みを忘れ、鎮まりたまえ。

開発神話 = 奥山と里山の線引き

||

「里山」の誕生

(2) 「奥山」と「黒山」「黒島」

奥山に迷って、死僧に出会う

冥界に通じる黒山の「大キニ暗キ一ノ穴」

黒島の鼠（根棲）、海底に巣喰ふ

||

「奥山」の表象世界

(3) アジールとしての「卒土」

長崎県対馬島南端

卒土という「奥山」



語り継がれた「卒土」の禁忌



大木を立て、
鈴鼓を懸け、
鬼神に事う。

あそこは天道シゲじゃけに
住んではならん

罪人神堂に走入すれば、則ち亦敢て追捕せず。

来往ノ人互ニ語言ヲナサズ。
口ニ莽草ヲ含ミテ行ク。

2

せめぎあう里山と奥山

(1) 近江葛川の「後山」と「秘所」

建長8年（1256）

葛川常住快弁の訴え

彼ら(伊香立荘民)申して云はく、

後山切り尽くし候畢、

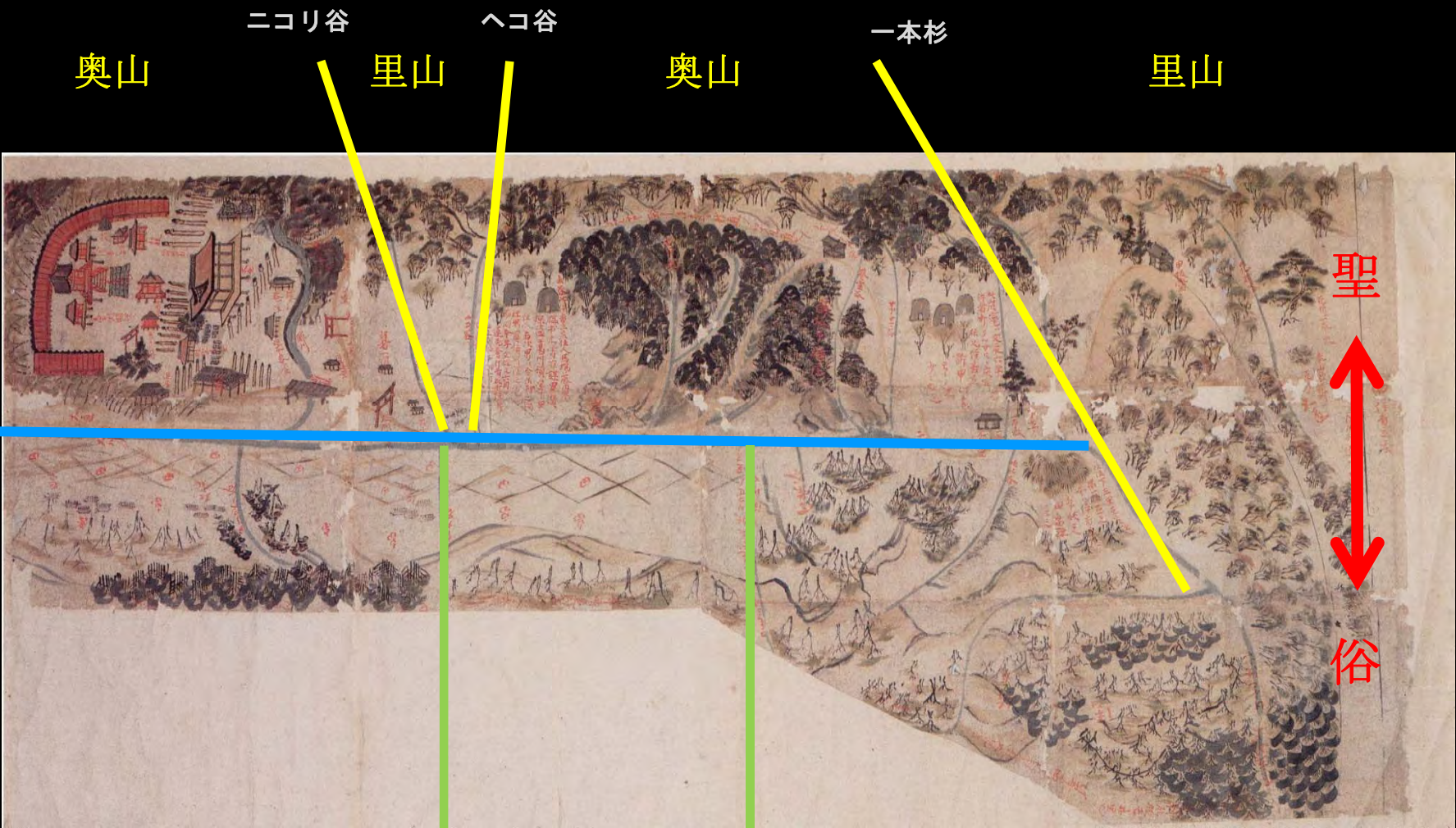
もし御禁なくば、

御霊山忽ち一本の木も生えるべからざるや、

偏に明王の怨敵なり、



近江国葛川絵図



大川

奥山

ニコリ谷

里山

へコ谷

奥山

一本杉

里山

聖

俗

ムラ

イカ谷

ナラ

アマミ河

ヤマ

絵図の構図と世界像

葛川絵図研究会による 樹木表現の分類

A 針葉樹=奥山 (聖所)

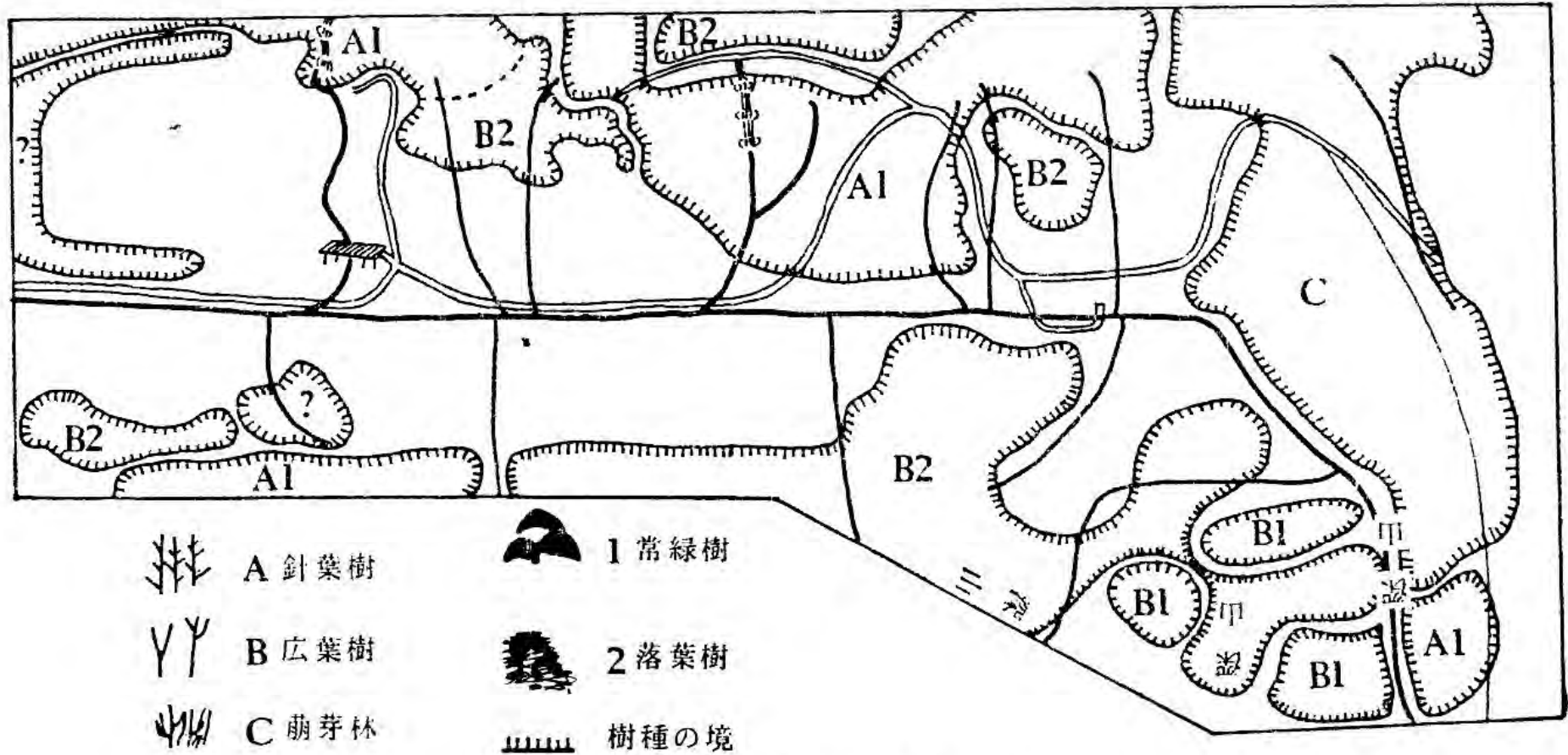


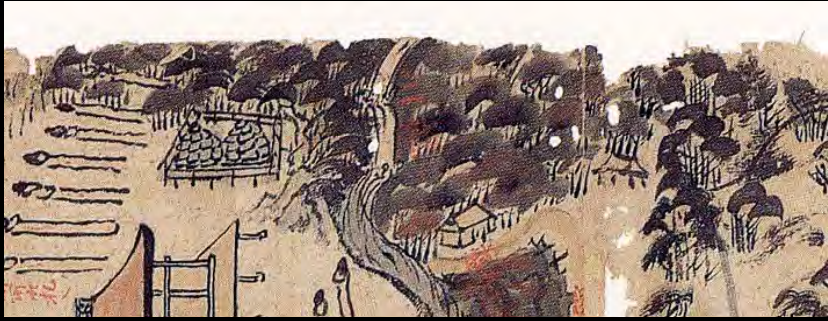
図7 彩色絵図の植生復原

B 広葉樹=里山

C 萌芽林=里山 (後山)



植生分類を見直す



針葉樹 = 奧山



広葉樹A
||
里山 (ヤマ)

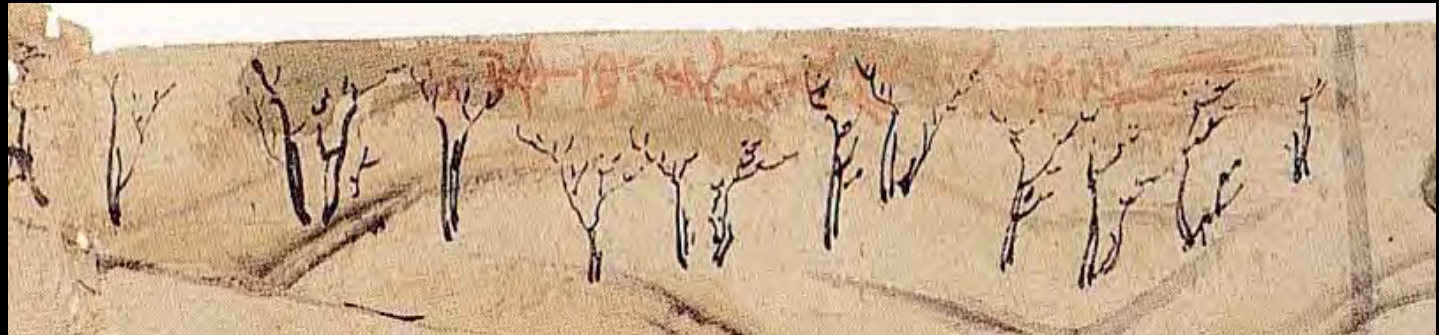




広葉樹B

||

里山 (ムラ・ノラ)





広景樹C=街道・谷筋



特徴的な独立樹
(ランドマーク)



菖蒲

その他

竹林



樹木表現の分類

針葉樹＝奥山

広葉樹A＝里山（ヤマ）

広葉樹B＝里山（ムラ・ノラ）

広葉樹C＝街道・谷筋

単独樹（ランドマーク）

その他

(2) 対馬の「内山」と「卒土山」

正平9年（1354）

豆酩神官しんはらの訴え

しゆせんほんおきり、
やきはらい、
くわうやになされ候へハ、

(1万本の樹木を伐り、焼き払って、荒野にしたので、)

御まつりのさおいとやらせ給、
あるいは大風ふき、
こうすいいて、
くにのわつらいとなり候

(天道祭に支障をきたし、大風が吹き、
洪水となって、国の煩いとなった。)

おんなわらはへちりちりはらはら二なり、
おらひさけふこゑなのめならず候、

(女や子どもたちが散り散りばらばらになって、
泣き叫ぶ声が尋常ではない。)



里山

内山

瀨川

神田川

卒土(外)山

内院川

奥山

3

加賀輕海郷の「里」と「山」

(1) 加賀輕海郷の「山百姓」と「里百姓」

梯川中流域の中世荘園







山百姓と里百姓

損免	百姓階層		年貢収取システム		生業			
なし	貧富の差小さい？ (富裕層を編制できず)		名田	代銭納 (反別四〇〇文の名々色々公事銭・雑物)	生産性低？ 山間空閑地の開発途上 ↑ 元亨二年「新開田数注文」 昌作の拡大 (四三町五反余 一二〇筆 二一人)	米 + 桑代綿、苧、漆紙、油、胡麻、栗、椎、薯蕷、炭、薪 + 鉱山資源	河内	山百姓
	貧富の差大きい	太夫・仲□□		代銭納 (反別四五〇文の各名色々銭)	生産性高		大野	
散田損亡米			散田	現米納 (散田所当米)		米中心	本郷	里百姓

(2) 延文元年 (1356) の梯川洪水

延文元年（1356）の加賀のお天気

3月19日

九頭竜川洪水（『白山宮荘巖講中記録』）

5月

梯川洪水、井橋落ち、田畠損亡す

（『金沢文庫文書』）

6月1日

大風吹く（『安楽山産福禅寺年代記』）

7月20日

大風吹く（『永光寺年代記』）

延文4年

(1359)

天下疫病、人民多く死す

（『安楽山産福禅寺年代記』）

貞治元年

(1362)

大旱（『永光寺年代記』）

損免のからくり

		見米 在国代官時料米			見銭 在国代官雑用以下		
	倉付	在国代官時料	散田損亡米	京都替貸	在国代官雑用以下	兵粮用途	
貞和4年 (1348)							

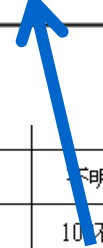
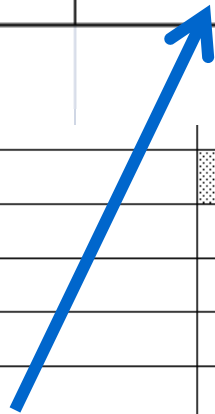
在国代官雑用銭 (山百姓) から補填

		見米			見銭	
	倉付	在国代官時料	散田損亡米	京都替貸	在国代官雑用以下	兵粮用途
延文元年 (1356)	1石	55石2斗3升7合		26貫828文		80貫文
延文2年 (1357)	1石	35石3斗	14石6斗5合	24貫400文	48貫403文	50貫文

応安4年 (1371)	5斗		不明	不明	不明
永和元年 (1375)	5斗			10石	
永和2年 (1376)					
永和3年 (1377)	5斗			100石	
永和4年 (1378)	5斗			100石	

洪水による損亡は散田米 (里百姓) のみ

在国代官時料米 (里百姓) を減らして相殺



洪水による損免は
散田米（本郷＝里百姓）にのみ
認められたという事実

大野・河内（山百姓）に
洪水被害はなかった？

(3) 梯川の洪水史

水との闘いの歴史

年(日) (西暦)	頁	概要	出典
明治二年	一六五五	大杉谷川の出来で津田流集し、九二石の被害。	『四尾村史』
寛文八年六月二二日	一六六八	大暴雨で土手決壊、泥町・松任町で床上二・三尺。	『小松市史』
延享七年七月六日	一六七九	連日の降雨により、樺太橋の橋桁が水没、小松・松任で浸水。	『小松市史』
延享八年八月六日	一六八〇	大洪水で、豊高一八四石が被害。	『四尾村史』
寛政三年七月一五日	一六八六	大水により流集家屋あり。	『松任谷町史』
元文三年六月二日	一七三八	四月一九日から七回の出来、一四〇石の被害。	『四尾村史』
寛延元年六月五日	一七四八	豪雨により樺川決壊、六〇〇軒の浸水。	『小松市史』
宝暦七年五月二八日	一七五七	所々の河川が氾濫、小松の被害は小。	『小松市史』
明和二年五月二一日	一七六五	降雨による洪水で小松城下の橋樑さる。流死等一名のほか不明。	『小松市史』
明和五年四月	一七六八	手取・樺川氾濫、一〇〇軒で約三万石の被害。	『小松市史』
安永三年六月一九日	一七七四	降雨続きで各河川増水し、浸取六〇万石。	『小松市史』
天明三年八月	一七八三	七月六日から豪雨、洪水により泥町・松任町浸水。	『小松市史』
寛政元年六月七日	一七八九	降雨による出水で床上浸水。	『小松市史』
文化五年六月一日	一八〇八	各河川氾濫、大畑寺から小松に被害甚大。	『小松市史』
文政三年五月一六日	一八二〇	六月九日まで大雨、五度の大水。	『小松市史』
文政八年八月一四日	一八二五	風雨激しく、横河で一廿一六〇〇石の浸水甚重。	『小松市史』
文政一一年八月一〇日	一八二八	雨風と大風により屋中・加賀で被害甚大。	『小松市史』
文政一二年一〇月二二日	一八二九	安宅水戸口閉塞のため増水し、四七三軒の浸水甚重。	『小松市史』
天保二年六月六日	一八三二	豪雨により樺川決壊し、二六軒の浸水被害。	『小松市史』
弘化二年七月二〇日	一八四五	各河川増水、泥町・松任町ほか八〇軒と田圃の被害。	『小松市史』
安政六年八月二三日	一八五九	河川増水、小松で田圃の被害大。	『小松市史』
明治一四年二月二四日	一八八一	樺川一二万石の堤防決壊。	『小松市史』
明治一七年七月一七日	一八八四	樺川・駒橋川決壊。	『小松市史』
明治二九年八月二日	一八九六	大豪雨により大杉谷川が大出来、八戸の床上浸水、樺吉藩田の老母は溺死。	『四尾村史』
明治三五年七月一四日	一九〇二	樺川は九尺余の増水で一カ所決壊。	『小松市史』
明治三六年九月一七日	一九〇三	大杉谷川増水で、一六戸の床上浸水甚重。	『四尾村史』
明治四三年八月二一日	一九一〇	樺川氾濫で、五〇〇町浸水。	『小松市史』

《里百姓＝ノラ》

氾濫原

水田中心
散田と階層分化

《山百姓＝里山》

災害強度

多様な生業(畠作)
開墾途上地域
非氾濫域
名編制と階層未分化



(4) 鑿々たる鼓の声

— 洪水の記憶 —

雨岩

梅雨に胴体だけあらわす蛇

やすな

其の形は一眼の蛇也。

むかしやすなと云ふ女、
人を疑ひ過ぎし此川に身を投じて死去し、
化して蛇と成。

その子孫とて、此赤瀬の中には

小蛇といへども皆一眼也。

小松棧橋迄も下る事有り。

其時は必時あらずして

洪水町をひたすと云ふ。

鼓が淵と云ふには、
底にたんたんたる聲聞ゆ。

昔鼓を取落せしが、
水底にしづみて取揚ぐる事能はず。

其鼓今に水神となるよし、

里人いひ傳へたり。

一日利兵衛又た山に入り、
斧を以て老杉を伐る、

時に忽ち太鼓の音せり、

驚々として起り、

彼の翁（天狗）曰く、

人倫屢々悪戯を為して余等の平和を害す、

故に太鼓を打ちて脅威せざる可からず、



九龍橋

鼓ヶ淵 (大野)

本蓮寺
(津波倉)

土合橋

天狗巖 (岩上)

やすなの一眼の蛇
(赤瀬)

雨岩の蛇体
(西俣)

響々たる聖なる鼓の音色

||

洪水の記憶

||

伐採抵抗伝承

鼓の声

||

「奥山」の声

おしまい